

# 太田殿女房御返事

建治三年十一月十八日 五六歳

柳のあをうらの小袖、わた十両に及んで候か。

此の大地の下に二つの地獄あり。一には熱地獄。炭起すみををこし、野に火をつけ、  
せうまうの火、鉄のゆのごとし。罪人のやくる事は、大火に紙をなげ、大火に木屑  
をなぐるがごとし。この地獄へは、焼きとりと、火をかけてかたきをせめ、物をねたみ  
て胸をこがす女人の墮つる地獄なり。二には寒地獄。此の地獄に八あり。涅槃經に云は  
く「八種の寒氷地獄あり。所謂阿波々地獄・阿吒々地獄・阿羅々地獄・阿婆々地獄・  
優鉢羅地獄・波頭摩地獄・拘物頭地獄・芬陀利地獄」云云。此の八大かん地獄は、或はかん  
にせめられたるこえ、或は身のいろ等にて候。此の国のすはの御いけ、或は越中のたて  
山のかへし、加賀の白山のれいのとりのはねをとぢられ、やもめをうなのすそのひゆる、  
雉子の雪にせめられたるをもてしろしめすべし。かんにせめられて、をとがいのわな  
めく等を阿波々・阿吒々・阿羅々等と申す。かんにせめられて、身のくれないににたる  
を紅蓮・大紅蓮等と申すなり。いかなる人の此の地獄にをつるぞと申せば、此の世にて  
人の衣服をぬすみとり、父母師匠等のさむげなるをみまいらせて、我はあつくあたゝか  
にして昼夜をすごす人々の墮つる地獄なり。

六道の中に天道と申すは、其の所に生ずるより衣服と調のをりて生まるゝところなり。  
人道の中にも商那和修・鮮白比丘尼等は悲母の胎内より衣服と調のをりて生まれ給へ  
り。是はたうとき人々に衣服をあたへたるのみならず、父母・主君・三宝にきよくあつ  
き衣をまいらせたる人なり。商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に衣をまいら  
せて、世々生々に衣服身に随ふ。橋曇弥と申せし女人は、仏にきんばら衣をまいらせ  
て、一切衆生喜見仏となり給ふ。今法華經に衣をまいらせ給ふ女人あり。後生には八寒  
地獄の苦をまぬがれさせ給ふのみならず、今生には大難を私ばらひ、其の功德のあまりを  
男女のきんだち、きぬにきぬをかさね、いろにいろをかさね給ふべし。穴賢穴賢。

十一月十八日

日蓮花押

太田入道殿女房御返事